

創世記第18章1～10節 a

コロサイ書第1章21～29節

ルカによる福音書第10章38～42節

本日の旧約日課は、『聖書』の小見出しに、「イサク誕生の約束」とある箇所の一部です。主なる神様が三人の人（おそらく御使い・天使）を通して、アブラハムに現れ、サラに子どもの誕生を予告します。その予告は、最後の10節 a「彼らの一人が言った。『私は必ず来年の今頃、あなたのところに戻って来ます。その時、あなたの妻のサラには男の子が生まれているでしょう』」にあります。お話自体は、その後も続きます。生まれてくる男の子がイサクと名付けられる理由が、そこで示されるのですが、新しい聖書日課では、省略されています（以前の聖書日課では、10節 b から14節までが《》に入っていました）。

省略されたお話には、サラが「心の中で笑って」しまうという部分があります。この「笑う」という言葉から、「イサク」という名前がつけられるのですが、大切なのは、その名前の言葉上の関わりだけではありません。サラが「心の中で笑った」という反応自体にあります。

サラは、自分が出産不可能な年齢になっているという、常識的・理性的判断から、出産について予告されても、「心の中で笑って」しまったのです。サラは、御使い・天使と思われる人々を通した主なる神様の言葉であっても、常識的・理性的に受け入れられなかったのです。

サラは、子どもが生まれないことで、たくさんの苦しみや悲しみを受けて生きてきました。そして人生も終わり近くになっていました。そこに突然現れた御使い・天使が、子どもの誕生を予告したのです。「心の中で笑った」という短いフレーズは、表現してもしつこくないような、サラの様々な思いを示していると思います。しかし、主なる神様は、そのような人間の思いを、いろいろな意味で超えて、恵みを伴ってご意思をサラに示されたのでした。サラのお話は、人間の思いや感覚では、なぜという苦悩がどれだけたくさんあっても、主なる神様がそれらを超えて、恵みを持って導いてくださることを示しています。また他方、苦悩が深ければ深いほど、主なる神様の恵みや導きを簡単には受け入れられない人間の姿も示しています。そして、人間がそのような存在であっても、主なる神様は導いてくださる、そのこと示すために「笑った」ことが名前に残る「イサク」が、イスラエルの先祖の一人となったのです。

さて、そのようなこととは別に、単純に旧約日課と福音書とのかかわりを考えて読みますと、やはり客をもてなすことの大変さに注目が集まります。「アブラハムは天幕のサラのところに急いで戻り、『急いで、上質の小麦粉を三セアこねて、パン菓子を作りなさい』と言った」（創18:6）や、「アブラハムは凝乳と乳、そして調理された子牛を運んで来て、彼らの前に出した。木陰で彼らが食事をしている間、彼はそばで給仕をした」（創18:8）は、突然の客であっても、できる限り豊かにもてなすことの大変さと大切さを示しています。もちろん、

時代は異なり、大家族の長であるアブラハムの状況と、姉妹二人で暮らしているマルタとマリアの状況は異なります。また、「マルタと言う女が、イエスを家に迎え入れた」とありますから、アブラハムのように、突然イエス様が家の前にいたということではないのでしょうか。また、このお話の少し前の10章1節から13節には、72人の弟子たちを遣わすにあたっての、イエス様の注意事項があります。それは見方を変えれば、遣わされた人を受け入れる側の注意事項でもあります。マルタがそのことを知っていたかどうかは不明ですが、イエス様について噂は聞いていたと思いますので、もてなすことに奮闘するのは当然であったと思います。

イエス様の弟子派遣の教え（ルカ 10：1-13）の後には、「悔い改めない街を叱る」という小見出しの部分も続きます（ルカ 10：14-16）。その1節に「あなたがたに耳を傾ける者は、私に耳を傾け、あなたがたを拒む者は、私を拒むのである。私を拒む者は、私をお遣わしになった方を拒むのである」（ルカ 10：17）とあります。マルタは、そこにあるようなイエス様の言葉に耳を傾けなかった人ではありません。イエス様を家に招き入れたのですから、耳を傾けようとしていたのでしょうか。しかし、良い意味での常識的な判断で、イエス様をもてなすことに集中し、イエス様の言葉を聞くことを忘れてしまった。忘れはしなかったとしても、まずはもてなすことから、二次的な事柄としてしまったのです。マルタにはイエス様を拒否する意図はなかったと思いますが、常識的な判断が、結果としてイエス様の言葉を拒んでいたのです。また、そのことを、直前のお話である先週の「善いサマリア人」と関係させて考えることも大切です。「善きサマリア人」の話において、祭司とレビ人は、律法の常識的な判断に基づいて、追い剥ぎにあった人を無視したのです。マルタは、積極的かつ常識的にイエス様をもてなそうとしたがゆえに、イエス様を無視する結果となったのです。

理性的・常識的判断は大切です。しかし、その範囲にとどまっていれば、祭司やレビ人のように消極的に、あるいはマルタのように積極的に大切なことを見失うことがあるのです。それでは、自分の正しいと思う行為のために、いつでも非理性的、非常識的な行為をすればよいのかというと、そうでもないと思います。それでは結果さえ良ければよいのか、そうでもなく、大切なのは主なる神様のご意思を理解しようとすることです。それは人間的には不可能ですが、祈りを通して可能となるのです。だから、本日のお話のあとに続くのは、イエス様の祈り・主の祈りに関する教えなのです。わたしたちは一人ひとり、また教会でいっしょに祈ることが大切なのです。

先週、教区から「平和の祈り 2025年8月1日～21日」という小冊子が出版されました。週報担当の方々が印刷してくださいましたので、お持ち帰りください。今、世界各地で起こっている戦いや紛争、自然環境の事柄に関する問題の解決に必要なのは、理性的・常識的判断もありますが、それら人間の思いを超えた事柄です。それを見出すために、共に祈りたいと思います。ことに過去、現在、未来の事柄を思い浮かべながら、平和のために祈りたいと思います。祈ることから何かを始めたいと思います。